

「空気は、読まない。」は東京新聞のキャッチコピーだ。四月施行の改正少年法に基づき、十八、十九歳の「特定少年」を実名報道する報道機関がほとんどの中、中日・東京新聞は匿名報道を継続している(他は琉球新報と河北新報。民放テレビ各局は顔写真も報じた)。検察の実名公表を受け、事件の重大性に鑑み切り替えた、というのが大方の言い分だ。当局の発表によることなく、自らが主体的に己を律する自主自律の姿勢を守ることは簡単ではなからう。当然、そこには覚悟と責任が問われるからだ。

それは読んだうえであえて読まないようにする勇氣と、読み替えることができる。いまは忖度や同調というかたちで、周辺の空気を必要以上に読むことが求められ、合わせないと排除されるのではないかとの畏怖が蔓延している。たとえば、就職活動では相も変わらず、学生はピアスを外し、髪を黒く染め直し、白シャツにスーツ姿で面接に向かう。個を殺すことで「社会へ会社」へ忠誠心を競つかのよつだ。

おかしなことに對し、きちんと声をあげるべしとは言つものの、実際にそうした態度をとることが出来る人は少ないだろう。ちょっとした勇氣こそが、一番難しいともいわれる。しかし、そうした行動を周りがみんな見て見ぬふりをしているのは、世の中は前進しない。街頭演説中の首相にヤジを飛ばした聴衆を警察が強引に現場から引き離した事件で三月、裁判所は警官の行動を違憲違法としたものの、それは当事者が裁判を起し、当時の状況を写した動画があったからこそである。

その意味で、その場で一緒に声をあげたり、警察の行動をだしなめた

空気は読まない

専修大学教授 **山田 健太**

りすることは難しくても、記録に残して公開し、それが報じられることで広く問題が共有され、事態が動くことが証明された。規模も状況も大きく異なるが、まさにウクライナで起きていることも、ある意味では同じである。兵士や市民による写真や動画によって、私たちは何が起きているかの一端を知ることになる。

圧倒的にウクライナ側からの情報発信が多いことも含め、すでに言われている通り、個々の発信者が意図するかどうかを問わず、受け手である私たちは情報戦のただ中にあり、ある種の印象操作も含め大きく感情を揺さぶられることも少なくない。そしていったん傾いた心情は、どんな一方的に強くなることは、日常の交流サイト(SNS)で経験済みだ。まさに、自分好みの情報に吸い寄せられていく世界である。おそろしい今のロシア国内は、そうしたクレムリン発の国威発揚の情報に心地よさを感じていることだろう。

しかし、それは「幸福な監視国家」と称される中国でも外形的に完成されており、中国の若者と接すると天安門事件は知らないし、表現の自由は十分確保されていると答える場合が多い。日本でも変わらない。たとえば復帰五十年を迎える沖縄に關し、政府の意向に沿ったことで沖縄戦の「歴史の上書き」が教科書の記述でも進み、米軍関連の事件や事故が起きても通常の調査や取材さえかなわず、「事実」は置き去りにされたままだ。これらもれっきとした情報統制の一つである。

空気は読まないとは、送り手は世間におもわず愚直に現場に向き合い伝える、受け手はすつきり感がある情報に接した時は、いったん立ち止まるということでもある。

2022.4.24

ロシアのウクライナ侵攻が始まり、ちょうど2カ月。終結の道筋は険しく、子どもを含む一般市民や避難民への攻撃、虐殺といったロシアの蛮行は収まる兆しも見えません。発言欄への投稿もウクライナ情勢に関連するものが大半を占める状態が続いています。「胸が痛む」「怒りに震える」「戦争反対の声を上げよう」と思いの丈を訴える声はもとより、さまざまな考えが届きます。

ニュースを一覧で見ることが出来る。新聞の持ち味です。つたない記事同士が隣り合つていぬ連想が浮かぶことがあ十六日朝刊1面に、神宮宮木の伐採計画をめぐる都民の報じた記事があり、横に沖縄のインタビュウが載りました。の記事から沖縄南東部にあ嶽(せーふあうたき)の森こしました。

斎場御嶽は琉球王国の重が行われた聖所です。周囲し出す荘厳な気配に圧倒さがあります。森には沖縄戦とどめる砲弾池もあり、今

沖縄県南城市の「斎場御嶽」。神聖な森に包まれている



部屋の中にゾウがいる

週のはじめに考える

ダフィ大
統領の時
アも聞き
つとも至
米、英
次世界大